65

医史学関係資料の収集・保存・研究
――ドキュメンテーション化の観点から事例に基づいて

野尻佳与子・青木允夫
内藤記念くすり博物館

【医史学の研究と博物館資料】

医史学は、医の歴史を研究する学問である。こうした歴史的な研究には、関連する実物資料の調査を基本とすることが多いが、研究者は必ずしも研究上で必要な資料に辿りつけるわけではない。そこで、現存する資料を一括して収集・整理・保存し、幅広い人々が利用可能な状態で管理し、求める利用者への資料提供を円滑なものとする役割を、博物館（資料館・図書館）などの文化施設が担っている。

日本には、医療関連史資料を大量に保存できて、研究する公的な博物館が存在しないことから、医史学上の貴重な財産の散逸が懸念され、専門博物館の必要性が検討されてきたが、その実現には至っていない。企業、大学、団体や個人、財団法人などの民間機関や、地方自治体が設立した類似分野の文化施設などで、医史学関係資料も収蔵されているのが実情である。

【「モノ」を、情報を持つ博物館資料へ】

医史学に限らず、博物館活動は所蔵資料を基盤としている。しかし資料を集めただけでは、「モノ」は物の中に埋もれてしまい、博物館活動の基盤とならない。なぜなら集めたり並べただけでは、資料としての活用ができないためである。「モノ」から価値ある情報を引き出すことで、「モノ」は組織化され、必要に応じて活用できる博物館資料となる。これは単に、資料の保管上の位置が決まっていて、整然とコレクションが並んでいるだけではない。このことに加えて、各資料についてのデータを、整理された形式で記録・蓄積して組織化する必要がある。こうした一連の作業をドキュメンテーションといい、所蔵資料に関する情報を集めて整理し、必要に応じて利用できるようにすることである。

【くすり博物館の事例】

くすり博物館は、一九七一年、薬に関する総合博物館として、日本で最初に設立した施設である。これまでの三十四年間、実際に取り組んできた所蔵資料の収集・保存・研究について、分類方法とドキュメンテーションという観点から報告する。

くすり博物館設立の趣旨は、内藤豊次（エーザイ創業者）が「薬学・薬業の発展を伝える貴重な史資料が失われ、後世に悔いを残すおそれがある…」と考え、多くの賛同を得て資料を収集したことに基づくものである。

特定の団体や人物の所蔵品を核とした資料ではなく、複数の協力者から寄贈もしくは寄託を受けて収集したため、資料の由来や内容は実に様々である。平成十七年一月末現在六八一五〇点の資料と六〇五二三点の図書を所蔵している。薬をテーマとする収集活動であることに基づく片寄りはあるものの、国内の寄贈資料を中心に集めたこと、あえて制限や選別などをしてこなかったことによって、日本国内の医薬に関係する史資料の傾向や特徴などを推し測る指針としても重要といえる。

所蔵資料は、三〇の大分類をまず基本とし、さらに必要に応じて細分化した小分類に区分して登録している。所蔵図書は、日本十進分類法（ＮＤＣ）を基本にした上で独自の細分方法で分類している。

【専門博物館と附属図書館】

専門博物館にとって、その専門領域の図書館が果たす役割は大きい。博物館資料やその関連分野の調査において、関連図書を繙くことからわかる情報は多い。特に医史学分野の研究目的で博物館を訪れた利用者の大半は図書を利用している。

くすり博物館では、新たに隣接して附属図書館を現在建設中である。既に保存している貴重図書を、よりよい環境で後世へ伝えると同時に公開するための図書館である。医史学関係資料を収集・保存・研究するための施設として、医史学の研究及びその普及に貢献することが博物館の役割である。